

『就実論叢』第46号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2017年2月28日 発行

折り畳みと投影—〈歓待の掟〉注釈

**Pliage et projection;
commentaires sur *les lois de l'hospitalité* chez Pierre Klossowski**

松 本 潤 一 郎

折り畳みと投影——〈歓待の掟〉注釈

Pliage et projection;

commentaires sur *les lois de l'hospitalité* chez Pierre Klossowski

松本潤一郎 (表現文化学科)

MATSUMOTO Jun-ichiro

【序】

本稿は、「ロベルト三部作」とも称されるピエール・クロソウスキー (Pierre Klossowski, 1905-2001) の小説『歓待の掟』¹ (1965) 読解作業の一環として、表題にもなっている〈歓待の掟 *les lois de l'hospitalité*〉全文注釈を試みる。この奇怪な文書は、三部作の一つ『ロベルトは今夜』(1953) の中に現れる。〈歓待の掟〉は、ロベルト三部作に限定されることなく、作家・翻訳者・哲学者・画家など多彩な顔を持つクロソウスキーの仕事全体を理解するための重要な概念の一つである。研究史を見ると、この〈掟〉そのものに言及した論文はあるものの、全体を考察したうえで、クロソウスキーの他の仕事との連関を示した研究は、管見の及ぶ限りでは存在しない²。同文書全体の精読を通して、この奇妙な着想への理解を深め、彼の仕事を総合的に把握する準備を行いたい。

【構成と設定】

先ず『歓待の掟』の構成と設定について概略しておく。

『歓待の掟』は一九五三年発表『ロベルトは今夜』、一九五九年発表『ナントの勅令破棄』、そして一九六〇年発表『プロンプター』という三つの小説作品を一冊にまとめ、『歓待の掟』という総題とともに「序文」と「後書」を付して、一九六五年に発表された。収録順序は発表順序と異なっており、「序文」に続いて先ず『ナントの勅令破棄』、次いで『ロベルトは今夜』が置かれる。どの作品にもロベルトという名の女性が登場する。「ロベルト三部作」と呼ばれる所以である。

¹ Pierre Klossowski, *Les lois de l'hospitalité* (*Roberte ce soir*, 1953; *La révocation de l'édit de Nantes*, 1959; *Le souffleur*, 1960.), Paris : Les Éditions Gallimard, 1965. 日本語訳はピエール・クロソウスキー『歓待の掟』若林真・永井旦訳、河出書房新社、一九八七年。『ロベルトは今夜』(『ナントの勅令破棄』『ロベルトは今夜』のみ収録) 若林真訳、河出文庫、二〇〇六年。以下、『ロベルトは今夜』からの引用は全て後者から。

² René Schérer, *Zeus hospitalier : éloge de l'hospitalité*, Paris : Armand Colin, 1993. [ルネ・シェレー『歓待神(ゼウス)礼賛』安川慶治訳、現代企画室、一九九六年。] Jacques Derrida, *De l'hospitalité*, Paris : Éditions Calmann-Lévy, 1997. [ジャック・デリダ『歓待について：パリのゼミナールの記録』廣瀬浩司訳、産業図書、一九九九年。] などがある。

いずれの作品においても主な舞台はパリである。時代はほぼ一九五〇年代と設定されている。そして、どの作品においても、第二次世界大戦下の欧州における出来事——ナチス・ドイツによる占領下のフランスにおいて起こる一連の出来事——が、物語展開の核となっている。この点については、ここでは触れない³。

『ナントの勅令破棄』と『ロベルトは今夜』には一組の夫妻が登場する。神学研究者のカトリック教徒オクターヴと、厳格なカルヴァン教徒の妻ロベルトである。『ナントの勅令破棄』中の記述によると、オクターヴは一九五四年の時点で七〇歳と推定される。ロベルトの年齢は不詳だが、オクターヴより年少であることは確かである。記述から判断するに、おそらく一九四〇年代に二〇代だったのではないかと推測される。

『ナントの勅令破棄』と『ロベルトは今夜』では、ロベルトはフランス政府に任命された風記委員として、公序良俗を乱す文書類を検閲する任務に就いている。例えば『ナントの勅令破棄』には彼女が『ロベルトは今夜』を風紀紊乱の廉で発禁処分にしたことを仄めかす箇所がでてくる。また『ロベルトは今夜』では、彼女はクロソウスキーのサド論（初版一九四七年）『わが隣人サド』⁴への苛立ちを示している。なお『プロンプター』では彼女が風記委員に就いているという設定は明示されていない。（また『プロンプター』ではオクターヴではなくテオドール・ラカズという名の作家がロベルトの夫として登場する。ここには分身の主題が見いだされるが、これについては本稿註(3)に挙げた文献を参照されたい。）

以上をふまえて「歓待の掟」とはなにか、という点に入っていきたい。一言で述べるなら、それは夫が妻を、自宅を訪れた男性に差しだしてもてなすように、という内容の文書である。『ロベルトは今夜』序章部分における「歓待の掟」と題された一節に、その記述は見いだされる。それは客室の壁に架けられている古風な額縁の中に収められた、肉筆で書かれた文書であり、六つの段落からなっている。オクターヴが書いた——または引用ないし翻訳した——と推測される同文書は、客人が眠る寝台のちょうど上の壁面に飾られており、額縁には萎れた数輪の野花がささっている（『ロベルトは今夜』一六八頁）。

同文書は〈歓待の掟〉と呼ばれる文書の全文なのか抜粋なのか、一枚の紙に記されているのか複数の紙に記されているのか、何語で書かれているのか——テキスト原文はフランス語で記されているが、他言語（クロソウスキーの訳業から推するなら、おそらくドイツ語からラテン語）からの翻訳版という可能性もある——これらについては示されていない。いずれにせよ、この家に招かれた客は、額に収められた同文書を、読むことができるようになっている。なお同作品で同文書を引用している——したがって読んでいる——のは、オクターヴ

³ 松本潤一郎「ピエール・クロソウスキーにおける身体と交換——『歓待の掟』を中心として」北海道大学大学院文学研究科映像・表現文化論講座編『層——映像と表現』第七号、ゆまに書房、二〇一四年所収、四—二六頁、を参照されたい。

⁴ Klossowski, *Sade mon prochain*, Paris : Éditions du Seuil, 1947. [クロソウスキー『わが隣人サド』豊崎光一訳、晶文社、一九六九年。]

の甥にあたるアントワヌである。このことは同文書を読み進めてゆくと、アントワヌによる注釈が差し挟まれた箇所が見いだされることから確認される。オクターヴが同文書をアントワヌに読ませたがっていることが『ロベルトは今夜』中の記述からは窺える。アントワヌは伯母ロベルトに、恋慕のごとき情を抱いているからである。

以上をふまえ、同文書の読解を行うために、以下、注釈を加えながら「歓待の掟」と題された節の全体を引用してゆく。すでに述べたように同節は六段落からなっている。そこで、この節を一段落ずつ引用し、〈歓待の掟〉という奇妙な構想を、冒頭で述べた構想を視野に入れつつ、段落ごとに注釈を行う。

【外と内——第一段落】

第一段落は、この家の主人が同家を訪れた客人に対して——歓待と引き換えに——なにを要求するのかということ、「反映」「本質」「実体」「疏通」といった神学の言葉を用いて描きだす。客人は主人の友人や知人である必要はなく、見知らぬ者でもよい。ただし、明記されていないが、同文書の記述ならびに『歓待の掟』全体に鑑みて、客人の資格をもちうる者は実質的に、成人男性に限定されている。客人は夕刻に同家を訪れ、逗留する。主人は自分のもてなしに客人が喜ぶことに執着しており、さらには客人をもてなすことが同家夫妻の「本質」である旨の記述が、この段落には読まれる。しかし、それがはたして夫妻の合意の下に書かれた事柄であるかどうかは不明である。むしろ、『歓待の掟』全体の記述からすれば、夫（オクターヴ）の独断において書かれている——あるいは引用または翻訳されている——と考えるのが妥当である。

いずれにせよ、少なくとも主人は自分のもてなした客人が喜びを感じている（ことが主人にも伝わってくる）とき、みずからもまた喜びを感じる旨が述べられている。この喜びの伝達あるいは共有が、この段落では「反映」という言葉を用いて表現されている。先述したように、歓待するということが同家の夫妻、少なくとも夫の視点から見た、この夫妻にとっての「本質」である。言い換えれば、夫妻の「本質」は、歓待によって得られる喜びの「反映」である。それにとまって、ここで問題とされている「本質」は、特定の個人の内部に属するといった性質のものではない点を確認される。「本質」は自己のいわゆる内部にではなく、むしろ外部にあるという逆説的な事態が、『歓待の掟』——ひいてはクロソウスキー的思考の基礎——を形成していると言ってよいだろう。逆に言うと、客人の外部からの訪問がないかぎり、同家はその内部のみずからの「本質」をもたないことになる。そして本質をもたないなら、あるいは喪失するならば、この〈家〉は何らかのかたちで崩れることになるだろう。その意味で客人は、少なくとも同家の主人にとって、「救い主」——これもキリスト教（ここではとりわけカトリック）の神学的な形象である——でさえあるとこの段落では述べられている。それゆえここで立てられる問いは、外部にその本質を依存しない限り支えられないというならば、そもそもなぜこの家は、内部を備えた一つの家としてすでに存在しているの

だろうかという問いである。言いかえれば、内部が外部にある以上、この家の主人は、実質的には客人であるということになる。あるいは現在の同家の主人もまた、当初は客人であったと言うこともできるだろう。主人と客人は各々、閉じた「実体」である。それにも係わらず、ここで両者は「疏通」の関係に入り、主と客という互いの位置を交換する。そして、この交換は、主と客のたんに対称的（シンメトリック）な等置ではない。というのも、「実体」としての自己（個体として閉じた存在）を構成する当の「本質」が交換されるという意味において、この交換を客体的に見通す第三者の視点は、原則的に存在しないからである。言いかえれば、この交換は、自己においてのみ、あるいは自己を通してのみ行われる交換である。以下に引く第一段落において、客人が「あなた」と呼ばれていることが、その証拠である。この「あなた」という二人称の使用において、『歓待の掟』を読む者自身が、客人として、〈歓待の掟〉によって統べられる、この奇妙な世界の中に巻き込まれてゆくということが、示されている。以上に述べてきた注釈を確認するために、「歓待の掟」と題された節の第一段落を引用する。

この家の主人は、誰でもかまわないがともかく客が夕暮れにやってきて、彼の家に宿をとり、旅の疲れをいやすその顔に自分の喜びが反映するようにと、なによりも心をくだしている。だから彼は、自宅の玄関で気もそぞろに見知らぬ客のおとずれを待ちうけているのだ。やがて主人は、地平線のかなたから客人が救い主のように現われるのを目にとめる。遠くのほうに客人の姿が見えると、いちやく主人は彼に大声で呼びかける。「はやくおはいりください。ほくは自分の幸福がこわいんです」と。だからこそこの家の主人は、歓待というものを、客を迎える主人と女主人の心中に起こったかりそめのことと考えないで、彼らの本質そのものと考える人に感謝するのだ。つまり見知らぬ訪問客は、招かれた客としての資格で主人と女主人の本質を分け持つわけである。なぜなら、この家の主人は見ず知らずの客に対して、かりそめではない本質的な関係を求めているからだ。はじめ主人と客はいずれも、それぞれ孤立した実体にすぎず、互に意志の疏通はない。あつたにしろつねにかりそめのものにすぎない。あなたは迎えてくれた主人の家において、わが家から遠くはなれていると思い、その家の主人は所をえた自宅にいると思う。したがってあなたは、主人に対して、かりそめの見知らぬ者としてとどまるかぎり、あなたの実体のうちのかりそめのものしか、主人にもたらすことができないし、またいっぽう主人のほうでも、かりそめの主人としてあなたを迎え入れるのだ。ところでこの家の主人は、見知らぬ客にかりそめのあり方を越えて、あらゆる実体の根源までさかのぼるようにすすめている。だから主人は自分と客との間に本質的な関係を持ちはじめようとするのだが、じじつそれは相対的な関係ではなく、絶対的な関係となり、主人はいわば客と一体になる。そして、主人と訪問したばかりのあなたとの関係は、早くも主人の自己自身に対する関係にひとし

いものになるだろう。(『ロベルトは今夜』一六八—一六九頁)

「孤立した実体」である限りにおいては、個々の「実体」はみずからの「本質」をえられない。「本質」は外部にあり、それとの「疏通」に成功しないかぎり、みずからの「本質」を獲得することはできない。これが全ての「実体」に課せられた、「本質」を備えた「実体」になるための条件である。主人の「本質」は客人の「本質」であり、客人の「本質」はまた別の者の「本質」であり、以下無限に続く。だとすれば、これを、全ての「実体」がみずからの「本質」を外部に投げだしたことによって、各々の「実体」は己の内部にその「本質」を備えることができる、と表現しても変わらないだろう。かつて己の「本質」を他者に、あるいは外部に投げだした、もしくは譲り渡したことによって、現在、個々の「実体」は己の「本質」を獲得している——これは一つの逆説である。「本質」を譲渡したゆえに「本質」が獲得される。この逆説は、たんなる同語反復ではない。「本質」を備えた「実体」は、いかにしてその「本質」を獲得したのか、あるいは獲得するのか。〈歓待の掟〉には、その起源の光景において起きる出来事についての考察という面が見いだされると言ってよいだろう。起源の場面を考察するにあたっては、例えばこのような同語反復的な表現を用いるより他に、事態に迫ることは困難である。

【分裂——第二段落】

そしてこの困難な事態を、第二段落は別の仕方でも考察する。先の引用に読まれた一連の神学的用語に加え、さらに「可能性」「現実化（実現）」「存在の理由」「本質の理由」といった言葉を用いて、自己なるものの「本質」をめぐる考察が、今度はこの家の「女主人」に焦点化しつつ、展開されてゆく。主人が自己の「本質」を、他者（客人）を経由するという逆説的な仕方において獲得する事態が、ここでは自己の「可能性」とその「実現」または「現実化」という、様相を示す表現で言い換えられている。主人と客人の双方が、互いの「可能性」すなわち「本質」を「実現」あるいは「現実化」する、つまり獲得するということである。そして、この「可能性」の「現実化」は、妻の「非現実的な本質を現実化すること」でもある。これは実質的に、先述した〈歓待の掟〉にしたがって、主人が客人に己の妻を差し出すということである。夫からすれば、妻が夫を「裏切 [る]」ことになる。そして／しかし、この「裏切り」を命じるのは他ならぬ夫である。『歓待の掟』において夫オクターヴは、キリスト教（ここではとりわけカトリック）における婚姻制度——一夫一婦制——の教義として伝えられる、妻の夫への従属（例えば『新約聖書』「エペソ人への手紙」五章などに読まれる）に固執している。この「裏切り」において問題となっているのは、客人を介した、いわゆる日常生活からの夫妻の離脱である——この離脱が妻の合意を得てのうえではなく、夫の視点から構想されている点に注意されたい。後に引く第二段落を読むと理解されるように、日常生活における夫妻は、〈歓待の掟〉の中では、それぞれ主人および「女主人」になると

いう前提がある。日常生活の中においての妻は、〈歓待の掟〉に統治された世界においては「女主人」と呼ばれるのに対し、「主婦」と呼ばれて区別されている。この点に注意されたい。

そのうえで同段落では、妻の「本質」は夫への「貞節」にあるか、「裏切り」または「不実」にあるかのどちらかであると述べられる。なお、この場合「裏切り」または「不実」を行うのは「主婦」としての妻であって、「女主人」としての妻ではないと夫は考えている点に注意されたい。その点を踏まえたうえで、さらに、夫にとって「歓待の掟」は、この「貞節」か「不実」かのいずれかである妻の「本質」または「可能性」を「実現」ないし「現実化」することを目的としている。貞操の有無が共存するこの「矛盾」した状態において、夫にとっての妻、夫の視点から見た妻は出現する。夫にとって「主婦」としての妻の「存在」は確かなものとしてある一方、その「女主人」としての「本質」については、彼の認識・理解もまた「矛盾」に引き裂かれる。「主婦」としての妻が夫に従うなら、彼女は夫が指示する「歓待の掟」にそって客人にみずからを投げだし、夫を「裏切[る]」だろう。その場合、彼女は「女主人」としてではなく、「主婦」として「裏切り」を行うため、彼女の「女主人」としての「本質」を理解することはできないと夫は述べる。形式的には、主人としての夫にとっては「裏切り」が「貞節」の逆説的な証となる。この意味において〈歓待の掟〉は、夫が妻に対して抱く認識の矛盾または引き裂かれた状態を形象化したものであると言ってよい。言いかえれば、夫には彼女の「本質」をとらえることはできない（そして、問題はこの「矛盾」がどのように解決されるのかという点である）。

逆に「女主人」としての妻の「本質」が「不実」にあるとすれば、そもそも彼女は夫との関係など意識することなく、言いかえれば「歓待の掟」に従うまでもなく、すなわち「歓待の掟」とは無関係に、たんに客人にみずからを投げだすだけであるだろう。これは一見したところ「歓待の掟」に従っている場合と同じであるが、この場合、主人としての夫は、みずからの「本質」を、すなわち歓待の喜びを、客人を経由して受けとることができない。それでは妻は己「存在」および「本質」を、またその連関を、どのように捉えているのだろうか。このように夫の思弁は堂々巡りをくりかえす。結局のところ彼には、妻が「貞節」であれ「不実」であれ、彼女の「本質」を捉えることはできないのである。

ここで注意しておきたいことは、そもそも「存在」「本質」「現実」といった言葉を用いて思考しているのはあくまで夫の方であり、これらの語彙を用いて妻がみずからのことを考えているかがすでにじゅうぶん疑わしいという点である。その意味において夫は、自分が想像する限りでの妻、彼にとっての妻、彼における妻の視点に立って、思弁を展開してゆく——先述した妻の二重性（「主婦」としての彼女と「女主人」としての彼女）についても同様である——。また、ここで主人が問うているのは、歓待の場面において妻が主人となる可能性、「女主人」の条件である。先ほど妻の「存在」と「本質」のあいだで、夫が引き裂かれた「矛盾」について述べた。ここでは「主婦」としての妻と「女主人」としての妻とのあいだで、夫はこれと同種の引き裂かれた状態にある。確かな「存在」としてじぶんの前に

現れている妻を、夫は「主婦」としての妻ととらえ、その限りにおいて、妻の「存在の理由」を理解できると彼は述べている。他方、妻が「主婦」の状態を脱して「客をもてなす女主人になるためには」、「女主人」としての妻の「本質の理由」というものがあり、これが作用しているはずであると彼は考える。すでに述べたように「本質」という言葉は、夫がみずからの思考において用いているものである。そのため、妻の本質が「貞節」にあるのか「不実」にあるのか、あるいはそもそも「本質」といったものが存在するかどうかといったことは、結局のところ、彼には理解されないままである。先述した主人と客人のあいだでなされる「本質」の交換の非対称性が、(主人としての)夫と(「女主人」としての)妻のあいだにおいても、作用しているということになる。夫はただ、妻における「女主人」としての「本質」というものがあり、またその「理由」なるものがあるということのみを想定し、その内容については特に詮議をしていない(尤も、ここでは歓待が問題とされている以上、この「本質」が歓待と密接したものであることだけは、漠然と想像がつく)。むしろ、妻の「本質」を詮議するという口実の下、夫は己の想像あるいは幻想を、(自分のことを主婦とも女主人とも捉えていないかもしれない)妻に強いているとさえ言いうるだろう。少なくとも彼の中における(「女主人」としての)妻、彼にとっての妻に対して、彼は「本質」の存在を想定している。そのうえで彼は、「女主人」としての妻のこの「本質」が、他方における彼女の「主婦」としての「存在」の「実現」を妨げる「制約」を被ることになると述べる。そして先述した「裏切り」が、この「制約を打破する作用」として機能するというのである。「裏切り」が「制約を打破する作用」として機能する場合、すでに述べたように、客人とのあいだに「疏通」が生じて、夫は主人としての「本質」を獲得し、あるいは客人とこの「本質」を共有する。先述の通り、この「裏切り」はあくまで「主婦」としての妻が行うそれである以上、主人には「女主人」の「本質」を捉えることはできない代わりに、主人とのあいだに「本質」を共有する客人に対しては、彼女の「本質」が現出する。そして主人としての夫は、客人とみずからの位置との交換において、客人の位置に立ち、彼女の「本質」を——主人としてではないにせよ——客人として、捉えることはできるであろうと考える(なお、この交換が成就した場合に初めて、客人もまた、それまでは「非現実的な客」、可能性としての客にすぎなかった己の状態を脱し、みずからを現実の客人として「実現」または「現実化」させる)。逆に言えば、妻の「本質」が貞節にありと「不実」にありと、いずれにせよ、主人であるかぎりでは、彼は彼女の「本質」を捉えることはできないのであり、このことを彼は第二段落で、「主人は主人であるかぎり、敗れるにきまっている賭けをしなければならない」と形容している。この場合、「女主人」の「本質」が夫への「貞節」にあると想定されていたことに鑑みるなら、「客を迎える女主人」としての妻は、自分の「本質」を自覚する一方で、今じぶんのしている行為、「歓待の掟」に準じた行為によって、「主婦としての自分の存在が欺瞞に満ちたものに思え」、恐怖を感じることになるだろう。以上に述べてきた注釈を確認するために、「歓待の掟」第二段落を引用する。

こういう目的をもった主人は、招かれた客に託して自己を実現する。あるいはこうも言えよう。主人は客の可能性を現実化し、客のあなたは主人の可能性を現実化するのだ。主人のなによりの歓びは、主婦の中に彼女の非現実的な本質を現実化することである。その仕事を実行するものこそ客にほかならない。つまり主人は、主婦の裏切りを期待しているということになるのだろうか？　ところで、主人が思いえがいている女主人の本質は、こういう意味からすれば、とりとめのない、矛盾したものであるようだ。女主人の本質が主人への貞節にあるとすれば、主人が裏切りという逆の状態において女主人を認識しようとするかぎり、彼女の本質はとらえられないものとなるだろう。また、女主人の本質がまさしく不実にあるとすれば、主人は女主人の本質にもはやまったく関与できなくなるだろう。なぜなら彼女は、家の女主人としてつかのまながら客だけのものになるだろうから。主婦という概念は存在の理由という面からとらえられるが、主婦が客をもてなす女主人になるためには、本質の理由がなければならない。したがってその本質は、女が主婦として自己を実現していこうとするかぎり、制約を受けることになる。裏切りとは、こういう制約を打破する作用にほかならない。女主人の本質は主人への貞節にあるのだから、主人は自由に、主婦として存在している彼女の本質を客人の目に映じさせることができる。つまり主人は主人であるかぎり、敗れるにきまっている賭けをしなければならないのだ。主人は、女主人が歓待の掟を忠実に履行してくれるものと期待し、いっぽう女主人のほうでも主人に貞節であるかぎり、その貞節心にもとづく自己の本質に目をそらしてられない。そして主人の要求どおり、非現実的な客の腕に身をまかせて、客を迎える女主人にふさわしくなるようにするが、そのときには主婦としての自分の存在が欺瞞に満ちたものに思え、彼女はこわくなるのである。（『ロベルトは今夜』一六九—一七一頁）

第一段落で主人は「自分の幸福がこわい」と述べていた。ここでは妻がみずからの欺瞞に「こわくなる」と述べている。この恐怖を感じているのは夫の中における妻、夫にとっての妻であり、その意味では夫のみであると推測される。この点に注意して、第三段落を注釈する。

【存在の所有——第三段落】

先の引用から明らかなおりと、「歓待の掟」を仕掛け、妻と客人をそこに巻き込んでゆくという主人の「賭け」は、予め必敗を定められている。それでもなお彼はこの「賭け」を続けると述べている。先述したように、主人としては妻の「本質」を捉えることはできなくとも、「客人」となることにおいてなら、彼にも妻の「本質」を捉えることができるかもしれないからである。先述した〈歓待の掟〉に形象化される、夫による妻の把握の矛盾への想像的な〈解決〉がここにある。「想像的」と形容したのは、妻の「本質」が「貞節」であれ「不

実」であれ、いずれにしても主人は「賭け」に敗北すると述べられているからである。言いかえれば、これは矛盾の実質的な解消ではない。むしろ矛盾の先送りであり、その意味において疑似的な〈解決〉である。主人に一方的に「賭け」への敗北を帰すことによって、主人の位置にいた者は、矛盾を「主人」という位置に言わば預けたうえで、じぶんは客人の位置に移動しようとする——矛盾を引き受けるのはやがて「主人」という位置に到来するべつの者となる——。言いかえれば、彼は「賭け」への勝敗に拘泥することをやめ、勝敗は問題ではないという立場に移行しつつ、この「賭け」を続行しようとする。その意味において、矛盾は解消されないまま、置き去りにされる（それはやがて、別の位相において回帰し、主人の位置からさしあたり客人の位置へと逃げた彼を、再び恐怖に陥れるだろう）。

このように敗北と定められた「賭け」を、それでもなお続行する理由として彼は、その「本質」が「不実」と「貞節」のいずれであるにせよ、妻を「所有すること」を欲しているからであると述べている。所有権に基づいて、歓待を規則（「掟」）とする「賭け」（ゲーム）は続行される。ここで夫は、夫妻という人間関係を、夫が妻を所有する関係と解している。「本質」を今は理解できなくとも、ともあれその「存在」を「所有」してさえいれば、いつか理解できることもあるだろうという算段が、そこには垣間みえる。基本的に認識・知性の対象である「本質」に関して、「所有」は「存在」に優る。〈敗けるが勝ち〉の戦略を、夫は選んだと言ってもよいだろう。

この点に関して一点、指摘しておきたい。先述した通り、『歓待の掟』はロベルトを中心に据えた三つの小説作品を集め、「序文」と「後書」を付したものである。そして「序文」に先立つ同書冒頭には、三作いずれにおいても初出時に記されていなかった『新約聖書』所収「ルカによる福音書」第八章十八節からの引用——「だから、どう聞くべきかに注意なさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる」——が置かれている。何かを所有している者にはいま所有しているより以上のものが贈与され、所有していない者からは、現在じぶんが所有していると思っているものさえもが奪われるというこの言葉は、ここで私たちが注釈している、「所有」を「存在」の上位に置くという夫の〈戦略〉に対応していると考えられる。（「存在」を「所有」するというこの〈戦略〉を、クロソウスキーは『ニーチェと悪循環』⁵（一九六九年）において、〈自己を産む〉という奇妙な企てへと展開している。）

そのうえで依然、「女主人」としての妻の「本質」を把握するという夫の目的に変化はない。変化したのはその手段である。主人の位置を離脱して、客人の位置に立つことで、妻の「本質」を把握するということである。言いかえれば、ここでの客は、妻を「主婦」の位置から「女主人」の位置へと移動させ、妻の「非現実的」または「潜在」する「本質」を「実現」または「現実化」するための媒介である。以上の注釈を確認するために、「歓待の掟」第三

⁵ Pierre Klossowski, *Nietzsche et le cercle vicieux*, 1969, édition revue et corrigée, Paris: Mercure de France, 1975. [クロソウスキー『ニーチェと悪循環』兼子正勝訳、ちくま学芸文庫、二〇〇四年。]

段落を引用する。

こんどは逆に、もし女主人の本質が不実にあるとすれば、主人は賭けをしてみたところで無駄だろう、彼ははじめから賭けに敗れているのだから。しかし主人は賭けに敗れるスリルを味わいたいし、賭けに勝つよりはむしろ敗れることによって、主婦として不実を犯す彼女の中に、女主人たる本質を是が非でもとらえたいのだ。主人が望んでいることはけっきょく、女主人としての義務を忠実に果たすために不実の罪を犯すことになった彼女を所有することである。つまり彼は客を媒介にして、主婦たる彼女の中に潜在する何か、つまり、客との関係における現実的な女主人、主人との関係における非現実的な主婦を、実現したいと思っているわけである。（『ロベルトは今夜』一七一頁）

【三位一体——第四段落】

続く第四段落では、以上のように「女主人」としての妻の「本質」を、客人を媒介として顕現させようとする夫—主人は、今度は己の「本質」の顕現のしかたへと、考察の方向を転じる。その「存在」を「所有」したところで、妻の「本質」をとらえたいという、夫の知への意志ないし認識への欲望が完全に充足されることはないだろう。そこで夫は、妻の「本質」を把握したいというみずからの知への意志——次に引く段落では「好奇心」と呼ばれている——において、みずからの「本質」が現出しているというふうに考察をすすめてゆく。

注意しておきたいのは、ここでの知への意志というものが、一見したところ己の認識対象（客体）に向かってゆく主体の運動でありながら、実質的にはその対象（客体）を、むしろ、ほとんど構成しているかの様相を呈しているという点である。というのも、認識に困難を来たす対象（客体）を、そうであるにもかかわらず追究する意志とは、何であるのだろうか。他の事例の場合においてなら、認識に困難を来たすがゆえにこそ、認識への欲望が強まるとも言いうるだろう。しかし、ここで注釈している夫の思弁の中においては、予め、認識がその対象に到達することはないだろうと想定されており、しかもそのことが「彼ははじめから賭けに敗れている」という言いかたで強調されている。そのため、ここでは対象そのものが、予め「存在」しているものであるというよりはむしろ、この知への意志の衝動を——一時的にはあれ——満たすために仮構されているかのような印象を受けることになる。それでは、認識の対象（客体）を構成するのは、認識する主体なのだろうか。先ほど〈主体の運動〉と述べたため、あたかも主体が認識の対象を構成しているかのごとくに捉えられていると思われるかもしれない。しかし、じつはそうではない。〈歓待の掟〉の枠組においては、客体（対象）と同様、主体もまた、ここでは知への意志として現出している衝動によって仮構される。その意味において、この衝動には〈虚無への意志 nihilisme〉という側面がある。この点は、後に、第五段落における知への意志を駆り立てるはずの「原因」がじつのところ不在である

という夫の考察において確認する。

そのうえで、夫におけるこの「好奇心」——次に引く段落では、これこそ「客を歓待しようとする魂の力」であると言いかえられている——を、夫は「主人が彼女に向ける疑惑あるいは嫉妬」と混同しないしてほしいと述べている。その理由は、日常生活における夫としての彼には確かに「疑惑、嫉妬、憤懣の種」があるかもしれないが、いま問題とされているのは〈歓待の掟〉であり、またこの〈掟〉における主人としてのふるまいであって、そこで主人を衝き動かすのは「本質的な好奇心」だからであるという。以下に引く「歓待の掟」第四段落において、以上の注釈の妥当性を、確認されたい。

女主人の本質はこのようにとりとめのないものであるし、その本質が主婦としての純然たる貞節心にすぎない場合、女主人の持っている何かは、主人にはとらえにくいものに思えるはずだが、そのとき主人の本質は、女主人の本質を忠実に探ろうとする好奇心の中にあられる。この好奇心こそ客を歓待しようとする魂の力であり、それはうぶな女主人にとって、主人が彼女に向ける疑惑あるいは嫉妬に見えるにちがいない。しかしそのじつ主人は、疑惑をいだいているのでも嫉妬をしているのでもない。なぜなら、彼はただ本質的な好奇心を燃やしているにすぎず、好奇心の対象になっているものは、日常の生活の場合、夫たる主人の疑惑、嫉妬、憤懣の種になりかねないものである。（『ロベルトは今夜』一七一—一七二頁）

「客を歓待しようとする魂の力」ないし「本質的な好奇心」は、夫が妻に「向ける疑惑あるいは嫉妬」ではない。この点を夫は、第五段落では客人の客人たる条件として論じている。客人は夫の中に妻に対する疑惑や嫉妬を引き起こす「原因」ではない。むしろ逆に、「嫉妬や疑惑の原因にならない」ことこそ客人の客人たる条件であるという。このとき客人は主人（夫）が歓待の一環として差しだす妻を、日常生活において疑惑や嫉妬を引き起こす「主婦」としての妻ではなく、「歓待の掟」に従って「女主人」の相を「実現」しつつある妻として捉えることを、主人から要請されることになる。翻って、この要請に従うことによって、客人はみずからも客人に相応しい者へと「現実化」するとともに、差しだされた妻を「女主人」として「実現」させることに寄与することになる。そして、これによって夫もまた、日常生活における夫としての様態から、歓待する「主人」に己を「実現」させることができる。

このように、夫（主人）と妻（女主人）と客という三つの人格ないし位格は、歓待という「本質」を現出させるために一組——奇妙な歓待の〈三位一体〉——となり、三者は互いの「本質」を通して組み合わされ、各々の「本質」を成り立たせる⁶。言いかえれば三者は互い

⁶ クロソウスキーにおける三位一体について、本研究とは異なる視角からではあるが、以下を参照。Anne-Marie Lugan-Dardigna, "Unité du Père et du Fils", in Klossowski, *L'homme aux simulacres*, Paris: Éditions Navarin (Diffusion Seuil), 1986, pp. 149-161. ここではクロソウスキーのテキストを通

を前提し合う関係にあり、三者の出現と結合は一挙になされる。この三者は、例えば三者のうちのいずれかが先行的に存在して、残りの二者を牽引するといった関係にはない。また逆に、三者のうちの二者のみでもこの統一性から離脱するならば、残り二者の結合もほどかれ、統一性（「本質」）は失われて、三者は切り離される。

この事態は、先に引いた「歓待の掟」第一段落および、これに対して行った注釈において確認された事態と同じものであることが理解されるだろう。ここに見られる事態は、三者の「本質」はいずれも各々の外部にあり、逆に言うならば、各々がみずからの「本質」を他者に、あるいは外部に差しださないかぎり、どの者も「本質」を獲得することはできないという逆説の反復だからである。みずからの「本質」を他者あるいは外部に投げだす（もしくは譲り渡す）ことによって、個々の「実体」はみずからの「本質」を獲得する。みずからの「本質」の外部もしくは他者への譲渡を、その場にいる全ての者が一挙に行なうことにおいて、その場にいる全ての者が「本質」を分かち合い、「疏通」し合うことによって、はじめて個々の「実体」が「実体」として成立する。言いかえれば、個々の項が先ずあって、次にこれらの項が様々な関係を結ぶのではない。「疏通」という関係が、個々の項に先立つのである。そしてこの「疏通」を律する原則が〈歓待の掟〉であることになるだろう。夫も妻も客人も、ある意味では、この「疏通」を現出させるために、〈歓待の掟〉によって招集または召喚され、そして〈歓待の掟〉に巻き込まれ、翻弄される人物形象であると言ってよい。個々の人物がみずからの人格ないし位格を各々に保つのは、これらの位格を言わば〈通路 *passage*〉として、「本質」が駆けぬけてゆくためである。

このことと、先述した客人における疑惑や嫉妬を引き起こす「原因」の不在とのあいだには、密接な関係がある。「原因」とは、この「本質」が通過する通路を、複数の位格が協働して構成するための、一つの口実である。第五段落では、個々の人物を巻き込み翻弄しながら通過してゆく「本質」は、すでに述べた「好奇心」、あるいは「衝動」と呼ばれている。「衝動」は捌け口を求めて、人びとを待ちかまえ、「原因」をその都度作りだしては、人びとを通して、みずからの通路を構成する。「歓待の掟」に従うことは、この通路の協働的構成作業に参加することである。歓待とは「原因」を知らない「衝動」の別名であり、むしろ「原因」の不在を逆手にとって、口実としての諸々の「原因」をつくりだし、一見したところ然々の「原因」によって思考し行為する人びとの身体と精神を、己が通過してゆく捌け口とする。

人びとの思考と行為には「原因」がない。あるいは「原因」があったとしても、それは口実としての「原因」にすぎない。ということは、人びとの思考と行為には目的がない、あるいは目的があったとしても、それは「衝動」が走りぬけてゆくための——あるいは「衝動」

して、〈父-子-聖霊〉というカトリックにおける三位一体が、女性の〈排除〉という視点から批判的に考察されており、示唆に富む。また Alain Arnaud, « La notion d'oikonomia (3. L'économie du pathos) », in Pierre Klossowski, Paris : Éditions du Seuil, 1990, pp. 81-84. [アラン・アルノー『ピエール・クロソウスキー』野村英夫・杉原整訳、国文社、一九九八年、一〇七——一頁] も参照。

が走りぬけることこそを真の目的とする——口実あるいは契機としての「目的」であるにすぎないということを意味するだろう。

この事態は、先に引いた「歓待の掟」第四段落および、これに対して行った注釈において注意を喚起しておいた論点、すなわち知への意志という衝動が目指す認識の対象（客体）は、他ならぬ知への意志という衝動が構成したものであり、その意味において、この構成された対象（客体）が、つまるところ、みずからの衝動を——一時的にはあれ——満たすための仮構の所産であるという論点へと、私たちを立ち戻らせるものであることが理解されるだろう。すなわち、いま問われている〈歓待の掟〉における「衝動」もまた、不在の「原因」において人びとの身体と精神を駆り立て、そこを通過してゆくという意味において、〈虚無への意志 *nihilisme*〉という側面をもつということである。〈目的 *objectif*〉としての〈対象（客体） *objet*〉ないし「原因」の不在において、〈歓待の掟〉ないし知への意志は、その「衝動」としての本性を露呈させる。

ここで注意しておきたいことは、この「衝動」は、口実または契機としての「原因」あるいは目的を仮構しないかぎり、決してその潜伏を私たちに触知させることはないという点である。たとえ仮構された口実ないし契機としての「原因」または目的であったとしても、これがなければ、それ自体としては無目的—無秩序的な「衝動」を捉えることは、私たちにはできない。この意味において、クロソウスキーにとってニヒリズムは、つねに目的または「原因」を——たとえそれが仮象のものであったとしても——随伴させている。（この点は『ニーチェと悪循環』で大きな主題として論じられている。）

【法一外——第五段落】

以上をふまえて第五段落の注釈作業に戻る。日常生活を生きる夫において見いだされる「嫉妬や疑惑の原因」は、歓待を担う「主人」としての夫にとっては不在であるにもかかわらず、あるいは不在であるがゆえに、夫（主人）は客人に、「主人の嫉妬や嫌疑を利用して」、夫における「本質的な好奇心」を、言いかえれば「客を歓待しようとする魂の力」としての「彼[夫——引用者]の好奇心を刺激[する]」ことを要求する。すでに述べたことから明らかなように、「彼の」という所有形容詞が付されているにもかかわらず、この「本質的な好奇心」の真の担い手は、夫ではなく、より精確には誰のものでもない「衝動」である。「衝動」としての「好奇心」は、「嫉妬や嫌疑[という「不在の原因」——引用者]を利用して」、この世界においていとなまれる日常的な生活のなかに出現する。この出現に協力することを、客人は主人から要請されるのである。言いかえれば「原因の不在」を「不在の原因」として「現在」へともたらすこと——「現実化」または「実現」——が、「歓待の掟」の下す命令である。そのため主人と客人の関係は、一種の「抗争」の様相を呈してくる。主人は客人を唆して妻を受け入れさせようとするのに対し、客は「主人の好奇心」を、「嫉妬や嫌疑」を口実ないし契機として、引きだそうと試みるからである。この「抗争」において二者が互いに対して

繰り返す行為のいずれもが、「寛容」でありかつ「貪欲」である。妻を他者に差し出すという意味において主人は「寛容」であるとも言えるが、彼のなかにおいて作動する「好奇心」または「衝動」の強さからすれば、この「寛容」は「貪欲」でもあると言っているからである。そして「主人の好奇心」をうまく引きだせるかいなかに客人の「本質」の「現実化」はかかっているがゆえに——すでに見たように三者は一体である——、客人のふるまいもまた、「寛容」と「貪欲」のいずれをも意味しうることになるからである。「主人の好奇心」をうまく引きだすことができず、「嫉妬や疑惑」に「好奇心」が「吸収」されてしまうと、客人は、この「抗争」において敗北を喫することになるだろう——すでに見たように、夫はいずれにせよ敗北する。

以上のように述べられた直後、オクターヴの甥アントワヌによる〈歓待の掟〉への注釈が挿し挟まれる。〈歓待の掟〉という、伯父による（より精確には伯父を通して「実現」されうる）着想は、その基盤（有体に言うなら客人をもてなすための財）の不足ゆえに「神秘主義」に陥っていると、この注釈の中で甥は述べている。（経済的基盤の脆弱さによって神秘主義が呼びよせられるという論点は、『生きた貨幣』（初版一九七〇年）⁷でクロソフスキーが述べた、人間を貨幣として用いるという構想につながっている。というのも、人間を貨幣として用いるための必要条件として、潤沢な経済的基盤が要請されると、クロソフスキーは『生きた貨幣』の中で断っているからである。）

みずからの「好奇心」、より精確にはみずからにおける「好奇心」を、「不在の原因」を通して現出させる企てに協力する客人を、夫は「天使」にもなぞらえている。カトリックにおける天使には様々な種類と属性があるが、ここで彼が述べている「天使」には、「存在」を超越しているがゆえに「存在」の「本質」を認識する能力が備わっているという。客人は、「主婦」としての妻の「存在」のなかに彼女の「女主人」としての「本質」をとらえ、それを現出させる役目を、夫から期待されているということである。しかしながら客人もまた、夫そして妻と同様、人間としてこの世界に「存在」している者であり、「本質」をたやすく把握することはできないだろう。客人の協力を以てしても、「本質」が顕現するにはなお遠い——ということになる。言いかえれば、依然として夫には、妻の「本質」を把握することができない。そして、この把握不可能性そのものの前景化において、夫は、認識を超えた価値をもつ「宝」あるいは価値をつけることなどできないほど「貴いもの」として、妻を「所有」していることを確かめるだろう。逆に言えば、この価値化されえないほど「貴い」価値をもつ〈法外 *hors-prix*〉な「宝」としての妻を、〈歓待の掟〉を通して、それでもなお価値づけることができるならば、〈歓待の掟〉は「神秘主義」であることをやめ、「本質」の「実現」または「現実化」を成就させることになるだろう。この価値づけは、従来のそれとは異なる

⁷ Klossowski, *La monnaie vivante ; précédée d'une lettre de Michel Foucault à Pierre Klossowski sur La monnaie vivante* (hiver 1970), Paris: Éditions Joëlle Losfeld. [クロソフスキー『生きた貨幣』兼子正勝訳、青土社、二〇〇〇年。]

仕方において、認識への衝動または知への意志を挫くことによって、為されるだろう。

以下に「歓待の掟」第五段落全文を引用する。以上の注釈の妥当性を確認されたい。

したがって客は心を痛めるにおよばないし、自分が嫉妬と疑惑の原因となっているなどと悩む必要もない、そういった嫉妬や疑惑に主人夫妻の頭痛の種はないのだから、じつのところ、客とはまったく逆のものである。つまり客とは嫉妬や疑惑の原因にならないからこそ客なのだ。とすれば、嫉妬といい疑惑といっても無意味なことだ。客は見ず知らずの男としてのかりそめの関係を脱して、女主人と本質的な関係を結ぼうとする。こうして彼は主人の本質をも分け持つのだ。歓待は主人の本質であって、嫉妬や疑惑の衝動にとどまるものではない。それどころか衝動の原因がないことを巧みに利用して原因をつくり、その原因の中に主人の本質を実現しようとする。だからこそ客は自分の役割をよく心得ていなければならない。主人の嫉妬や嫌疑を利用して、遠慮なしに彼の好奇心を刺激しなければならぬ。そういう嫉妬や疑惑は夫としての主人にはふさわしいものだが、客を迎える主人にはふさわしくないものだ。主人は客を忠実にこの抗争にひき入れる。この抗争において、主人と客の二人はたがいに秘術をつくしあわなければならぬ。主人は客の慎しみをためし、客は主人の好奇心をためそうとする。この場合、寛容という言葉は適当ではない、なぜならすべてが寛容であり、すべてが貪欲であるからだ。しかし客は、主人の嫉妬や疑惑がその好奇心を吸収しつくさないように注意しなければならない。なぜなら客が自分の力をふるえるか否かは、主人の好奇心いかにかかっているのだから。(しかし、ここに新しい要素が介入して、新しい時代がはじまる。伯父のオクターヴは、こういう目的に達するには、具体的な生活手段が不十分であることを承知している。だから彼はきわめて曖昧模糊とした神秘主義におちこんでいるのだ——アントワヌのノート——) 自分の好奇心がこの不在の原因の中に現実化されることを願っているとしても、いかにして主人はこの不在を現在に変えることができるのか？ それはとりもなおさず、天使の到来を待ちうけていることではなからうか？ 主人の信仰心がたかまると、客のあなたが天使に見える——主人はあなたをかりそめの人と思っていたのに。しかしこの天使は、どの程度まで主人が想像している女主人の本質を主婦の中に実現できるだろうか？ というのは、存在を超えたところで認識している者にしか、その本質はわからないはずだから。主人はますます深く頭をさげるかもしれない。なぜなら客とは、天使であろうがなかろうが、ともかく主人に頭をさげさせる人なのだから。客人よ、あなたは承知しなければならない、主人もあなたも、女主人自身さえも、まだ女主人の本質を知らないのだ。彼女はあなたにふいを襲われると、その後かならず、失われた自分を主人の中に見いだそうとする。だが主人はそのときから、彼女の正体がとらえられなくなる。そして、あなたの腕に彼女が抱かれたことを知って、いままでになく彼女の宝を

貴いものと思うだろう。(『ロベルトは今夜』一七二—一七三頁)

【生きた貨幣——第六段落】

最後の第六段落は、以上に述べてきた〈歓待の掟〉への協力と実践を、客人すなわちあなたに呼びかけている。そして、もしこの実践が成功して、妻が「女主人」としての「本質」を「実現」し、「女主人」として「存在」するようになったとき、夫は「主人」であることをやめ、この家を出て、翻ってはみずからが「客人」となり、この家を(再び)訪れることになるだろう。この予告を以て、文書としての「歓待の掟」は終わる。第六段落を全文、引用しておく。

主人の好奇心が嫉妬と疑惑に堕さないように、客人よあなたは、主婦の中に女主人の本質を見分けなければならぬ。そしてその本質を現実のものにしてやらなければならぬ。さもないと、女主人は幻影にとどまるだろう。また、主人のために女主人の本質を実現してやらなければ、あなたはいつまでも、その家で見ず知らずの男ということになるだろう。あなたは例の天使であり、あなたがいれば、女主人に現実性もたらされる。あなたは主人のみならず女主人に対しても、十分な力をふるうことができるのだ。客人よ、あなたにはわからないのか？ あなたの至上の関心事は、主人の好奇心を導き、その家の主婦がわれを忘れながら、けっきょくはすっかり現実の存在になるようにしむけることであるはずだ。彼女が現実の存在になりうるか否かは、あなた次第であって、けっして主人の好奇心の力ではない。以後主人は夫としての一家の主ではなくなるだろうが、自分の使命を十分に果たすようにはなるだろう。そしてこんどは彼自身が客の立場に立つことになるだろう。(『ロベルトは今夜』一七四頁)。

主人と客人はこのようにして互いの位置を交換する。この交換を媒介する貨幣が、「女主人」としての妻の身体である。〈歓待の掟〉の中において、妻の身体は、一般的等価物としての貨幣へと生成または転化してゆくものとして、とりあつかわれているということである(この点についても本稿註(3)に挙げた文献を参照されたい)。そして、この貨幣を用いて主人と客人を売買するものが、あの「衝動」である。しかし、はたして妻の身体は貨幣となることができるのだろうか？

【終わりに——折り畳みと投影】

以上の注釈から得た論点をまとめよう。(一)〈歓待の掟〉には、外と内を巧妙に反転させる仕組みがある。(二)そこでは、〈女性的なもの〉という〈謎〉をめぐる、〈男性的なもの〉における知の分裂が見いだされる。(三)そこでは、〈存在〉を包み込む〈所有〉という機制が見いだされる。(四)〈歓待の掟〉の下では、主人-客-妻のあいだに、三位一体の構造が

成立する。(五)〈歓待の掟〉は、〈虚無（へ）の意志〉という〈不在の原因〉によって、作動する。(六)それは、女性の身体という形象を無から造形し、これを一つの媒体（貨幣）として、複数の身体を〈交換〉する。

いずれの論点も、〈無〉の折り畳みによる内／外の発生に係わる。注釈の中で指摘してきたように、これらの論点は『歓待の掟』以外のクロソフスキーの仕事にも通有する。

クロソフスキーによれば、諸個人の内部すなわち「本質」は、〈歓待の掟〉の「反映」である。私たちは、空間の折り畳みによって〈内部〉化された〈外部〉の投影、^{ひだ}襞にぶつかって屈折し、揺曳する、〈外部〉から差す光がつくりだした影である。筆者は現在、『ディアーナの水浴』⁸（一九五六年）を、〈折り畳み〉と〈投影〉の視点から分析していることを報告して、本稿を終えたい。

⁸ Klossowski, *Le bain de Diane*, Paris: Éditions Jean-Jacques Pauvert, 1956. [クロソフスキー『ディアーナの水浴』宮川淳・豊崎光一訳、水声社、二〇〇二年（新装版）。]